

## 第8回県政知事懇談

# 湯崎英彦の地域の宝 チャレンジ・トーク (神石高原町)

と き 平成26年12月6日(土)

ところ 神石高原町陽光の里文化ホール

### 目 次

	頁
開 会 .....	1
知事挨拶 .....	1
事例発表者紹介 .....	2
事例発表① .....	3
事例発表② .....	9
事例発表③ .....	15
事例発表④ .....	19
閉 会 .....	23

# 広 島 県

## 開 会

### ○司会（槇埜）

皆さん、こんにちは。（「こんにちは」の声あり）大変長らくお待たせをいたしました。

ただ今から「湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」を開催します。

私は、広島県広報課の槇埜と申します。

本日は、チャレンジに向けて、元気の出る会にしたいと思います。どうかよろしく願いいたします。（拍手）

## 知事挨拶

### ○司 会

それでははじめに、湯崎英彦広島県知事がご挨拶を申し上げます。

### ●知事（湯崎）

皆様、こんにちは。（「こんにちは」の声あり）本日は土曜日で、皆様何かとお忙しいところ、このチャレンジ・トークにお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

この会はいったん夏に計画されておりましたけれども、広島市の土砂災害で延期をさせていただきまして、本日に再設定をさせていただきました。災害にあたっては、県内各地の皆様、神石高原町を含めて多くの皆様から温かいご支援、ご協力をいただいたところでありまして、この場をおかりしてお礼申し上げたいと思います。

ご承知のように先週というか今週、天皇皇后両陛下もおいでいただきまして、被災した地域のお見舞いをいただいたところでもあります。我々県としても頑張って復興・復旧に努めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

このチャレンジ・トークは平成 22 年から始めまして、今は 4 回目の県内を回っているところです。神石高原町にも 22 年 9 月に初回、このときには「宝さがし」という言い方をしておりましたけれども、その会を皮切りに、今回でお邪魔させていただくのは 3 回目です。1 回は福山で開催させていただきましたので、それを合わせると計 4 回となっております。

これまでの間にこのチャレンジ・トークで 506 人の方に発表していただいております。こういった形でお集まりいただいた皆様は 7,500 人近い皆様にお集まりいただいております。いろいろな形でご意見をいただいております。

こういったことを私は以前から「県政の味噌樽」というふうに言いまして、いろいろなご意見を、一つ一つ必ずしも取り上げるわけではないのですけれども、いろいろな形で樽に詰め込んで、熟成させていくと、いろいろな方のご意見が混ざっていい味噌ができるというか、発酵していい味噌ができて、いい県政の味付けができていると思っております。こ

れもこれまで皆様にご協力いただいた賜物だと思っております。

そして、本日の発表もそうだと思いますけれども、今、チャレンジ・トークとして発表いただいておりますのは、それぞれの市や町で活躍していただいている皆様ですけれども、とてもすばらしい活動をされている方ばかりで、いつも元気をもらいます。私も元気をもらって帰りますけれども、傍聴されている皆様も元気をもらって帰っていただいております。今日もそのようになるのではないかと期待しているところでありまして、最後までお付き合いをいただければと思います。そして、それがまた明日からの何かしらの変化につながっていくとすばらしいなと思っております。

この会の開催にあたりましては、牧野町長をはじめとして、神石高原町の職員の皆様にご大変お世話になりました。この場をおかりしてお礼を申し上げたいと思います。

それでは、これからしばらく、長い時間になりますが、お付き合いをよろしくお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

## ○司 会

湯崎知事、ありがとうございました。湯崎知事、檀上のお席にお移りください。

## 事例発表者紹介

### ○司 会

それでは、本日の事例発表者の皆さんをご紹介いたします。発表者の皆さんは檀上にお上がりください。順にご紹介させていただきます。

まず、平成10年に広島県職員を退職し、実家のある豊松でトマト栽培に従事されているトマト農家の小田千寿香さんです。(拍手)

福山市から「星の里いせき」に移住され、団地内の住民と地元住民との交流に積極的に取り組まれている井関大矢自治振興会「星の里」班 班長の石岡基さんです。(拍手)

学校の枠を超えて町民と一体となってナマズの特産品化に取り組まれている県立油木高等学校3年生の高山将弘さん、兒玉早紀さん、前原幸亮さんです。(拍手)

神石・油木・豊松の三中学校が統合し新設された中学校として、新しい学校の風土づくりに取り組まれている町立神石高原中学校の田邊佑季さん、古森茉文さん、清水結衣さんです。(拍手)

どうもありがとうございました。事例発表者の皆様は、お席にいったんお戻りください。

ここからは湯崎知事にコーディネーターをお願いしたいと思います。それでは、湯崎知事、どうぞよろしくお願いいたします。

## 事例発表①

### ●知 事

それでは改めましてよろしくお願いします。本日事例発表していただきます4組の皆さんにおいていただいておりますけれども、それぞれ地域や学校、職場で積極的な活動をしていろいろな挑戦をしていただいている皆さんです。

はじめに発表いただきますのは、先ほどご紹介にあつたとおり、元県職員であります、トマト農家の小田千寿香さんです。

改めて小田さんをご紹介させていただきますと、小田さんは平成10年に広島県職員を退職して、実家のある豊松でトマト栽培に従事されています。地域ブランド「まる豊トマト」のPRや販路拡大のほか、他の生産者と協力をして農地の集積を行うなど、トマト産地の拡大に取り組んでいらっしゃいます。

今日の発表のテーマは「トマトで生きていくぞ〜!」です。それでは、小田さん、よろしくお願いします。

### ○事例発表者（小田）

皆さん、こんにちは。今、ご紹介いただきました小田千寿香です。大変立派な紹介をしていただいたのでどうしようと思っておりますけれども、ちょうどお昼ご飯を食べられて眠たくなっている時間だと思いますので、ちょっと元気をつけて、まずはトマトの栽培について皆さんにご紹介していきたいと思っております。

まず、トマトの一番最初の仕事、春なんですけれども、テント張りをしております。冬の間テントを上げておりましたのを春になってこうやってすべてのハウスを張り直していきます。これがハウスの作業なのですが、高いところに上るので、これから年をとっていくとだんだん難しくなっていくのですが、何とか家族で頑張っています。

春の仕事でもう一つ大切なのが定植準備です。石だしです。造成地なんですけれども、いまだに大変大きな石が出てきます。人間の大きさと比べていただくと分かると思うのですが、危険です。

その後、今度は定植準備として、堆肥をまきます。これは堆肥を機械に積んでいるところです。前は家族で何とか自力でやっていたのですが、これを機械でするようになってから随分楽になりました。あと、土壌改良材等の追肥ですね。トマトは連作を嫌うので、こうした土壌改良材とかを入れて、連作に負けないトマトづくりをしています。

定植準備なのですが、溝切りですね。畝立てをしない栽培方法もあるのですが、我が家ではこうやって溝を切った後、じょれんで1筋ずつならして丁寧に丁寧に畝を立てていきます。

実はここら辺はまだまだ寒いので、地元の方でしたら分かると思うのですが、5月は泣き霜、遅霜があります。5月の連休ごろに大きな霜がどんと来て、せっかく植えたトマト

がペアになります。それを何とか食い止めるために、うちでは内張りを春にもやっております。その内張りの準備ですね。ハウスの中にもう一つハウスをつくるようにやっています。これは大変費用がかかることなので、1年で全部はできません。何年かかけて両親が頑張ってくれました。

春になって定植、ハウス苗ですね。昔は地面にすぐ植えられる苗ではなくて、これは今、苗を定植しているところですけども、今は地面にすぐ植えられます。でも、昔は、以前の定植はポット準備というのをしていました。ポットが50個ですかね。これ1個に200CCともう少しぐらい土があるので、それを7000ポットから8000ポット、欲がかさんだときには1万ポット分、準備しなければいけません。大変な量です。春、田植えもしないといけけないのに、この準備が大変なので、やめよう。この水やりも1人がまるまる1日かかってしまいます。大変な仕事なので、うちではもうやめましょうねということで、今ではすぐに植えられるトマトに変えています。これが昔の鉢植えの状態です。1個ずつ植えるんですけども、トマトもだんだん大きくなってきます。鉢ずらしもしないといけません。しかも、こんなにたくさんの鉢を広いハウスの中に運んで植えないといけません。腰が大変痛くなります。とてもじゃないけどできないということで、今ではすぐ植えられる苗に変えました。

初夏、この時期になりますと、大きくなったトマトがふらふらしてきます。めまいを起こしているのではなくて、自分で自分のトマトを支えることができないんです。なので、糸で吊ってしっかりとまっすぐ立っていられるようにしてやります。この糸吊りの作業と同時に、真ん中に白いものが敷いてありますが、マルチを敷きます。ご存じのように神石高原「まる豊トマト」はみなエコファーマー登録をしています。雑草が生えると、その雑草に虫がついて病害虫防除のために農薬をたくさんまかないといけなくなります。それを防ぐために、雑草を生やしたくない。でも、除草剤はまけない。なので、マルチを使って草を抑えるようにしています。白いマルチを使っているのですが、光を反射して、下からもたくさんトマトに光を与えることができます。できるだけ省力化で、お金はかかるんですけども、省力で、そういったお金をかけてもできるトマトづくりを頑張っています。

我が家は、さっきも言ったようにお米をつくっています。わらがあります。なので、通路にはわらを敷いております。このわらを敷くことによって、夏場、ハウスの中の温度が、とても暑いときには40度近くになります。その上がりすぎた気温を抑える効果もあるし、冬になると適度な保湿、保温効果もありますので、こういったものを併用してトマトの栽培を行っております。

これは私の母です。ハウスカーの上に乗ってすごくうれしそうにしていますが、今、糸巻きをしております。糸巻きというのは、上の高いところにあるパイプに糸をひっかけて、トマトを吊るための糸を下に垂らす作業です。簡単に単純な作業ですが、これを8000本ぐらいいしますと、腰が痛くなります。こういったしんどい作業も明日の1円、10円、100円

になると信じて頑張っています。

これは粘着テープです。下にあるのが粘着テープ、上にあるのがラノーテープと言って、虫がこのテープに接触すると卵を産めなくなるテープです。こういうもので殺虫剤の回数を減らすなどして効率よく、そして省力でつくれるようにやっています。

これはトーン作業です。トマトは放っておいても自家受粉できることもあるのですが、私たちはこれで食べていきます。確実にトマトを実らせなければいけません。こういうふうに1段目は確実に着果させるためにホルモン剤を使ってトマトトーンというもので着果していきます。

これが途中のトマトの状態です。苗木も大きくなってきました。

これが収穫のときの状態です。私はトマトのことを重役様と読んでいます。なぜなら、うちで一番の稼ぎ頭です。トマトの都合に合わせて人間がふりまわされています。なので、トマトの収穫もトマト様に向かって頭を高くしてはいけません。最敬礼です。最敬礼の状態、葉っぱの陰に隠れて、まるで箱入り娘のようにぬくぬくと育ってきたトマトを1つずつ丁寧に手摘みで収穫していきます。

収穫しますと、下のほうの段があきます。あいたトマトがどんどん上に伸びていくと、直射日光を奪い合うような形になってトマトの身長だけがどんどん大きくなってしまいます。そうすると作業が大変になりますので、吊り下げという作業をします。成長点がいつも太陽にみんな均等に同じようにしっかり当たるようにするための作業です。こちらの作業です。トマトを1本ずつ隣にずらしていく作業です。これを年間7回から8回やります。8000本のトマト掛ける7回すると、大体どれぐらい重労働なものか分かっていただけだと思うのですが、私たちは植えたときからこうやってトマトを一生懸命管理して育てています。

いよいよ出荷ですが、うちではこの出荷のことを嫁入りといいます。消費者の皆様のもとに大切に育てたトマトを届けるので、行ってらっしゃいということですね。嫁入りは農協の方が全面的にバックアップしてくださっています。この立派な選果場もそうですが、私たちはトマトをつくるだけで今はいいんです。昔は自分でつくったトマトを自分で箱詰めして、県内市場、大阪市場に出荷していました。今はつくるだけでいい。農協に持って行くことによって、農協で箱詰めをして、きれいに選果されたものを各市場に出していただいています。

こちらは蜂の巣箱の写真ですが、トマトの受粉作業、1段目はトマトトーンを使って確実につけましたが、2段目以降は蜂の力でやっています。蜂の力も借りて、こうして大きなハウスでも家族3人、プラス収穫の時にはパートさんが今ではうちに6～7人来てくださっているのですが、それで何とかトマトを栽培することができています。

この団地も、できたときには高原町をトマトの人で埋めることができなかつたので新規就農者ということで、入植者の方に来ていただいています。全く農業の経験がなかつた方

がほとんどだったのですが、こういうふうにとマトをつくる技術を覚えられて、わずか5年後にはしっかり先生になっていました。ずっと百姓をしてきた人間と違って頭が柔らかいので、いろいろな柔軟な発想ができるんです。私も元新規就農者です。今ではすっかり先生ですが、そういう方にいろいろなアドバイスをいただいたりします。

今、映っているのが、フラミンゴ状態なんですけれども、とマトの下葉を刈っています。吊り下げするときに古い葉があると病気や虫の巣になってしまいますので、こちらをなくしています。

これはケチャップづくりをしているところですが、特産品であるとマトを使って何かをしようということで、昔からあった「川東とマト部会」というところでケチャップづくりをしています。はじめからケチャップをつくっていたわけではないのですが、試行錯誤の結果、何とか自分たちでもおいしいと思えるケチャップづくりをすることができています。

これはハウスの中で薪をしているのですが、ちょうど今時期です。朝、午前中に収穫するのですが、手が大変冷たいです。ハウスの中は温かくなってくるし、外は冷たいし、とマトは露で汗をかいたような状態になっているので、手が冷たいので、薪をして、手をぬくめながら収穫をしております。これが大体今の時期のハウスの状態になります。この時期になって、だんだん霜にやられてとマトも弱ってきているのですが、それでも最後の1粒まで大事に出荷しようということでやっています。

そして片付けですね。元気に頑張ってくれたとマトをこのように刻んで、うちでは田んぼにまいています。うちのお米はとマトの栄養分だけで大きくなっています。ですから、重役様は栄養分も、お金もしっかりかけて、うちでは一番お金はかかるけれども、稼ぎ頭ということですよ。

片付けの風景ですが、これは冬の間に片付けが済んで、テントを出したところですよ。こちら辺は雪は少ないけれども寒いので早死にするところですよ。こういうところで寒さに当てることによって、葉っぱに残っていた害虫がもしかしたら死んでくれるかもしれない。あるいは、雪の中に入れることによって、余分な肥料や堆肥が流れていくかもしれない。そうなるだろうということで、こうやってテントをはずして、また、次の年の春を迎えるわけですよ。皆様ご清聴ありがとうございました。こうやって私たちはとマトをつくっております。(拍手)

せっかくのチャレンジ・トークということなので、これからどうしたいのかということをお客様にも聞いていただきたいと思っております。

まず、先ほども言いましたが、私たちはパートさんがいなければこれだけたくさんのとマトを生産、出荷、販売することができません。うちのハウスで働いてくださるパートさんのみならず、農協の選果場で働いてくださるパートさんもしっかりです。ですが、とマトという作物は、1年中出せるわけではありません。夏場だけの仕事ですよ。この間、例えば半年間、あるいは3ヵ月、4ヵ月でもいいから、とマトで食べていきながら、なおかつ自

分でも稼ぎを持っていらっしゃる、あるいは仕事を持っていらっしゃるような方が地元で定住して下さることを常に願っています。食べていける農業ということがまず第一の大前提なのですが、たくさん植えなければ食べていけない、生活できないというのが、悲しいですけれども、今の現状です。

高齢者になると、トマトをずっとつくり続けることができません。働き盛りと30代、40代の方は言われるのですが、実はこの方たちは働きたい盛りでもあると思うんです。働きたい。仕事をしたい。そういった方々の力をしっかりお借りすることができればと思っています。そうすると、例えば生産、しっかり働ける方はしっかり働いて、十分稼ぐ。そうすることで生産力がアップします。生産力がアップすると、市場への供給も安定してきます。つまりは、価格の安定につながります。こうなってくると、価格が安定してくるので、小規模の農家でも、うちももうちょっと頑張ってみよう、もう1年頑張ってみよう、去年は500本植えたけど、今年は400本にして、もうちょっと頑張ってみようかということで、高齢になっても持続可能な農業ができます。トマトが高い時期をねらって、その時期にピンポイントで出荷するだけでも十分もとがとれるような農業、そういった農業ができることが私はトマトで食べていくことだと。もしかしたら年金がもらえるような年になってもトマトのおかげで納税者になれるかもしれない。そういった農業を目指しております。

できましたら、この地域にたくさんの方に定住していただきたいのですが、実際トマトというのは、お米で換算してもいいのですが、1ヘクタールの田んぼがありましたら、現在1人でつくることは可能です。これでは定住者を増やすことにはなりません。ですから、これから定住者を増やした上で、なおかつ、しっかりと農業をしていくことができること、そういうことも考えて、年相応に弱っていく体力と相談しながら、持続可能な息の長い農業ができることを考えています。

最後までお聞きいただきありがとうございます。これで発表を終わらせていただきます。(拍手)

### ●知 事

小田さん、ありがとうございます。ご実家がトマト農家をされていたということですが、県庁に入られて、それから実家を継がれたというか、今は何代目ですか。

### ○事例発表者(小田)

2代目です。

### ●知 事

2代目になられたわけですが、このトマト農家をやるというのは、何かきっかけがあって県庁を辞められたのか、それとも最初からトマト農家をやるつもりで県庁に入られたのか、その辺はどんな感じだったのですか。

### ○事例発表者(小田)

実は私は漫画を書くのが大好きで、自宅ですべて絵を書かせていただいていたんです。



県庁に勤めていたときに30歳を目前にしまして、周りは結婚するか、仕事にばりばり燃えていくかというときに、私はこのまま独身生活でいくのかなと考えたとき、たまたまモンゴルに行く機会があって、モンゴルに行かせてもらったときに、ちょうどモンゴルがロシアから独り立ちをした時期で、あちらの方は皆さん大変積極的で、皆がポジティブだったんですね。それに私は単純なので触発されて、それから自分のやりたかったこと、絵を描くことをちょっと頑張ってみようと思って県職員を辞めさせていただいて、絵だけではもちろん食べていられないので、両親がちょうどトマトをしていましたので、そこに就職して、都合のいいときだけ働いて、あとは絵を描いちゃえ、みたいな形でした。

●知事

なるほど。では、ちょっと表現は違いますけれども、最初はトマト農家になるつもりはなかったけれども、なってしまった。

○事例発表者（小田）

そうですね。百姓の家に育つと、大概子供は百姓を嫌いますので、私もご多分に漏れずそうでしたけれども、やってみたらすごく楽しくて、今ではお勤めには戻りたくないな、みたいな。

●知事

なるほど。それは、絵とか漫画家よりもトマトはおもしろいと。

○事例発表者（小田）

まず一番は食べていけるという自信ですね。ある程度の年齢になって、食べれない、生活に困窮するというのは大変つらいことだと思うので、食べていける、しかもそれが自分にとってやりがいを見いだせる仕事であった、ということだと思います。

●知事

トマトづくりのやりがいというのは、どんなことですか。

○事例発表者（小田）

それはもう我が大将です。

毎年1年生だって言うんですけども、ピークがころころ変わるんです。なので、薬とかも多少は変わってきますし、去年はこれでこれだけとれたから、今年はもっと工夫してもっとたくさんとろうという目標が単年で立てやすいです。ですから、それがやりがいかなと感じることができます。

●知事

そういうやりがいもあり、毎年同じことの繰り返しでもなく、経験値もあるけれども、新しく努力とかもしなければいけないし、そして、食べていける。

○事例発表者（小田）

そうです。

●知 事

食べていけるということが大事ですよ。

○事例発表者（小田）

はい。一番大事です。

●知 事

一番大事ですよ。パートさんもたくさんいるということで、地域の雇用にも貢献されていると。

○事例発表者（小田）

いや、貢献まではまだいってないですけども、本当に団地全体、多分中山間地域は全部同じ問題を抱えていると思うので、そこをなんとかして、県域みたいな広い知識で考えてどうにかならないかなと。この近辺だけではもう限界があります。

●知 事

協力してやるわけですね。

○事例発表者（小田）

そうですね。

●知 事

今、女性の活躍というのは非常に大事で、それから自立できる農業というのもすごく大事で、その両方を体現している小田さんは本当に素晴らしいなと思います。儲かる農業を目指して頑張っておられる小田さんにもう一度大きな拍手をお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。（拍手）

## 事例発表②

●知 事

それでは続いての発表です。井関大矢自治振興会「星の里」班 班長の石岡基さんをお願いしたいと思います。

改めて石岡さんのご紹介をさせていただきますと、石岡さんは平成 24 年に神石高原町井関地区内の定住促進住宅団地「星の里いせき」に住宅を新築して、福山市から移ってこられたということです。

町外からの移住者の多い「星の里」自治組織の班長として、コミュニティーやルールづくりに取り組むほか、消防団等の活動を通じてもととの地元の住民の皆様との交流を積極的に図っておられるということです。

今日の発表のテーマは、「未来への贈りもの～ここからふるさとをはじめよう～」です。それでは、石岡さん、よろしく申し上げます。

## ○事例発表者（石岡）

はじめまして。星の里団地から参りました石岡と申します。本日はよろしくお願ひ申し上げます。

まずはじめに、「星の里いせき」定住団地について簡単にご説明させていただきます。星の里いせきは神石高原町井関，182号線沿いの丘陵地を宅地造成し，2010年より神石高原町が販売を開始した定住型団地です。自然のままの地形を生かし，多くの木々を残す緑豊かな団地です。CATVや上下水道などのインフラ整備も整っており，快適な暮らしを提供されています。

販売当初は総区画数が72区画で，63区画が販売済みとなっております。また，昨年7月に新たに90区画追加販売を開始し，既に8区画が販売されております。いま現在45世帯，148名が暮らしております。そのうち中学生以下の子供は60人を超えております。また現在，建築中，着工予定の世帯も含めると50世帯を超える大所帯の団地になる予定となっております。

私は広島県福山市の出身ですが，福山市の高校を卒業して20年間大阪で暮らしておりました。2009年，6年前に福山市に戻りまして，とある事情から住まいの物件を探すことになりました。福山市内の分譲地などを週末ごとに家族で見回ったのですが，なかなかいい物件がなかったのと，たまたま182号線沿いの星の里いせき好評分譲中の看板が目にとまったので，ちょっと寄ってみようかということで団地の中に入ったところ，販売員とおぼしき方がするするっと近寄ってきて，お客様よかったですかとパンフレットを渡されて，話を聞くだけ聞いてみようということで説明を聞いたのですが，帰りの車中で妻といろいろな話をしまして，あんなところに住めたらいいなというのが共通の意見でした。

その後，紆余曲折ありましたが，晴れて2013年2月に星の里いせきに引っ越して参りました。団地内はもちろん，神石高原町に知り合いはおろか，友人もいないという状況の中で，家族3人，愛犬1匹，静かに暮らしていこうと思っておりました。

引っ越しの最中，光ケーブルの配線工事に来られた方がたまたま井関地区の野球チームの監督をされているということで，練習に参加させていただいて，またその野球チームにも入団させていただきました。そこで地元の方と知り合いができたということです。

引っ越ししてからまもなくすると，星の里班，要は星の里いせきの団地の中に班があるのですが，そこの副班長さんが訪ねてこられまして，自治会費を払ってくださいということで，確かに福山に住んでいるときも町内会費というのがありました。似たようなものだろうとお支払いしまして，毎月23日の夜に常会という会合をやっているのは是非石岡さんも来てほしいということでしたので，翌月からその常会にも参加させていただきました。非常に若い子育て世代が多い団地だなという印象を受けました。

夏ごろの常会で星の里班のほうに地元の消防団の方が来られて，地元の消防団に星の里からも入団していただけないかというお話がありました。私自身も団地の中で火災が起

こったらこれは大変だなということは思ったのですが、年齢的にはちょっと厳しいかなと思っていました。11月末に、翌年の新入団員募集締め切り日当日になって、星の里団地から1人も入団希望者がいないということで、消防団の副部長さんが私の家に訪ねてこられて、「石岡さん、ちょっと頼むよ。何とかならんか」ということで、団地の中の若者数名に声をかけて、私を含めて6名が三和方面隊第一分団第三部に入団することとなりました。はじめは団地内での防災という意識で取り組んでいたのですが、消防活動が続けるにあたって、地元の防災意識というふうに変わってまいりました。地元の方がたくさんいらっしゃいますので、非常に濃い交流を図ることができたと思っています。

この消防団に入団した途端に、井関小学校には新友会というものがあるんよと悪魔のささやきがありまして、湯崎知事は新友会のことはご承知のことと思いますが、地元の若者が集まってこの井関の自治を盛り上げていこうという会です。年間のメインのイベントとして、去る7月26日に第9回井関大矢納涼花火大会が開催されました。星の里班からも4人の新友会員が参加して、4月から入念な論議を重ねて、無事に終えることができました。

さて、今年の3月末に星の里班の役員改正が行われることになりまして、役員を選出するということになりましたので、私のほうから宴会部の役員に立候補したのですが、前班長から班長をやってくれという言葉いただきましたので、快く引き受けさせていただきました。

4月から星の里班の班長ということですがけれども、1ヵ月余り、まず最初に班長として取り組んだことは、住民の皆さんに正しい情報を平等にお伝えするということが一番大事ではないかと考えまして、毎月1回の常会の前に、自治振興会の班長会という会議がありまして、そこで常会もしくは自治振興会からの情報や配布物、こういったものを班に持ち帰って班の皆さんに伝達、お話する。ただ、その常会に来られなかった世帯に対して、チラシは後からお配りできるのですが、なかなか情報の伝達ができないという事情がありますので、常会の翌日に「常会だより」というかわら版のようなものを作成して、各世帯へ配付するようにしました。しかしながら、世帯数が非常に多いものですから、これだけの部数をプリントして各世帯に配付するというのは非常に労力を使います。この7月から常会だよりの電子メール配信を開始しまして、全世帯の3分の2ほどの世帯に登録していただきまして、ペーパーレス化、それからポスティングにかかわる時間の労力も激減しました。

前班長さんのほうから宿題を何点かいただいております、今、星の里班の集会所というのは販売案内所を間借りしている状態ですが、こちらの問題を何とかしてほしい。それから、団地内に公園があるのですが、この公園の整備を進めてほしいということでしたので、5月に入りましてすぐに陳情書を作成し、牧野町長ならびに町議会のほうへ提出いたしました。なかなかいい回答がいただけなかったということで、引き続きこの議案については取り組んでいきたいと思っております。

それから、星の里班、団地ができて年数が少ないということもありますが、活動費が極めて少ないということなので、試験的に今年の7月と9月に、アルミ缶、古新聞、古紙、こういったものを回収して、業者に持ち込んで換金しようという試みを行いました。住民の皆さんのご協力によって非常に多くのアルミ缶が集まりました。いかに星の里に酒飲みが多いかということがよく分かったのですが、この12月にも第3回目を行うつもりでございます。

それから、この星の里は町内から移られた方もいらっしゃれば、私のように町外から移り住んで来た者がおります。今年4月後半には星の里ウエルカムパーティーというバーベキュー大会を行いました。昨年、一昨年までは地元の町議会議員の藤田晃己さんをはじめ、地元の方々のお力添えで行っていましたが、今年に関しては星の里独自で主催して、100名を超える参加者でバーベキューを行いました。

今年の5月に、消防団、それから新友会でお世話になっている方から井関水源の環境を守る会、通称ホテルの会という有志の団体があると。井関の各班には幹事が1名ずつ配置されているので、星の里の皆さんにもこういった活動に是非参加していただきたいということで、石岡さんを勝手に幹事におきましたということでした。これは、井関の各家庭に供給されている上水の水源となるダムがありますけれども、このダムの周辺の草刈り、清掃活動を行って、きれいな水面に集まるホテルを觀賞しようという会です。私自身、この会の活動内容、それから考え方を伺いしまして、これは非常に大事なことだと感銘を受けました。星の里に暮らす私たちの飲料水の水源を、以前より地元の方々が守ってこられました。今の私たちの安全な水の確保・維持だけでなく、未来にわたって子供たち、それから孫たちの世代以降にもこのすばらしい水源を守る意思、活動を伝えていきたいと思っております。

6月15日、猛暑の中、この活動に井関地区から31名が参加しました。そのうち12名が星の里からの参加者で、草刈りの後、地元の皆さんと慰労会を行って、数匹のホテルが觀賞できました。

6月に来見体協主催のソフトボール大会が行われ、星の里からも経験者、未経験者を問わずチームをつくって参加しました。結果は準優勝と残念でしたが、大会終了後に団地内の公園にブルーシートを敷いて反省会を行いました。参加者の奥様方がおつまみを1品ずつ持ち寄って、日が暮れるまで宴が続いたと。いかに星の里に宴会好きの方が多いかということがよく分かりました。

それから、今年の夏休みに入って、団地内の公園で朝、ラジオ体操をやりましょうということになりまして、多くの子供たち、保護者が参加して体操を行いました。私も出勤前に参加して、切れのある体操を行って、スタンプカードに判を押していただいております。

また、この11月からですが、星の里SCという団体を発足して活動をスタートしました。

冬場は子供たちのスポーツ少年団の活動がなくて、どうしても家の中でゲームばかりやっている状況があるという住民の方からの声がありましたので、何とか運動を通じて健康促進、青少年の健全育成を目的とした活動を行っていかうということで、来見小学校の体育館を使って毎週金曜日にフットサルを中心としたスポーツ活動を行っております。いま現在、約20名の子供たちが参加して活動を行っております。

それから、最後になりますが、今年の5月、日本創生会議において消滅可能性都市というのが発表されました。わが神石高原町は広島県内でもトップにされております。平成26年12月1日現在、神石高原町の人口は、皆さんご承知のことと思いますが、1万11人となっております。10年前からの人口推移を見ても、確実に人口減少の傾向にあります。星の里いせきが誕生したことによって、三和地域に限っていえば、一時的に人口は増えたかもしれませんが、働き盛りで子育て世代が多いですけれども、いずれは高齢化が進んでいくと思われまます。神石高原町全体で見れば、減少傾向の一途をたどるばかりです。

今の子供たちが進学や就職で町から出て行くことはあると思います。ただ、将来的に星の里に帰って、自分たちもここで子育てをしたいと思えるような団地づくりをしていかなければならないと思っております。そのためには、町に雇用も必要だと思います。また、行政と住民がタッグを組んで取り組んでいく時代だと考えております。

私自身、この11月から人口減少対策推進本部ワーキングスタッフという非常に長い名前の会議に、牧野町長から指名されまして会議に参加しております。何とかこの神石高原町の人口減少に歯止めをかけて、いい町づくりが行えるお手伝いができればと考えております。

そして、星の里いせき、新しい団地づくり、それから地域の方々との交流、そういった意味でいうと、私自身はある意味旗振り役であって、ある意味つなぎ役のようなものかなと考えております。

我々のいま現在の生活も非常に大事だと思うのですが、子供たちの未来にそういった思いを贈り物にしたいと考えております。

私が昨年この神石高原町に引っ越してきたときは、正直、よそのものだったんです。私自身もよその意識というものを非常に持っておりました。しかし、たった2年弱の間に多くの地元の皆様と交流させていただいて、また、温かくウエルカムな気持ちで迎えていただいたということに非常に感謝しております。そして、ここから私のふるさとづくりを始めていきたいと思っております。本日はご清聴ありがとうございました。(拍手)

## ●知 事

石岡さん、ありがとうございました。石岡さんは割とさらっと淡々と語っておられたのですが、今ずっとメモをしていたら、まず、野球チームに入って、常会に参加して、消防団に入って、小学校の新友会に入って、ホテルの会に入って、星の里スポーツクラブを進めて、今、人口減少対策ワーキングチームのメンバーということで、7つ。で、仕事

をしておられますよね。8つの帽子をかぶっておられて、親もやっておられるから9つぐらい帽子をかぶってやっておられるのですけれども、すごいな。しかも、2年の間にこれだけ帽子をかぶされて大変じゃないかと思うのですけれども、最初のきっかけ、ケーブルテレビの人が野球をやりませんかというところから始まったのだと思うのですけれども、もともとこういうマルチプレーヤー、お好きだったとか、あるのですか。

#### ○事例発表者（石岡）

そうですね。私ずっと大阪で20年暮らしております、大阪で会社をやっていたのですが、単なるお酒好きの営業マンだったのですが、福山に帰ってくるきっかけは、家業を引き継ぐために帰ってきたのですけれども、その中でできれば静かに暮らしたいという思いが本当に強かったんです。誰も知らないところで新しい人生をスタートしたいという思いもあったんです。妻は大阪出身なのですが、当然神石高原町には何のゆかりもなく、知り合いもない中で、ゆっくり暮らせたらいいということでこちらに移ってきたのですけれども、入って正直びっくりといたしますか、これだけスケジュール帳に空白のない1年を過ごしたことは過去にないと思うぐらい、なおかつ、いろいろな地域活動を行うことによって、団地の住民を巻き込んで地域を活性化していければ、それが町のパワーになるのではないかと考えております。

#### ●知 事

もちろん団地自体が新しいということもありますけれども、ホテルの会など、それまでは団地のメンバーは参加していなかったのが、石岡さんが声をかけて、12人参加されたというのは、これは今年ですか。

#### ○事例発表者（石岡）

そうですね。今年の6月にはじめて声をかけていただいて。

#### ●知 事

参加をするとか、子供たちが運動不足になるのではないかとということでスポーツクラブを始めたりとか、これは性格もあるかもしれませんが、最初、野球チームに入りますかと言われて、普通だったら知らない土地で静かに暮らそうと思っているところなので、いやいや遠慮しておきますと言ったら、こうならなかったかもしれないですね。

#### ○事例発表者（石岡）

そうですね。

#### ●知 事

最初、その野球チームに入ろうかなという、その一步がここまで広がっていったということと、それから、その力が団地の皆さんをいろいろ巻き込んで、水源の環境であるとか、あるいは子供たちの子育ての環境整備であるとか、そういうところに巻き込んでいく。

私は石岡さんが野球をやりたいという顔をされていたかどうか分かりませんが、声をかけたケーブルテレビの方もすばらしかったと思います。こういうふうには何気ないつ

ながりというか、野球チームに入りませんかというのもちょっと勇気がいると思うんです。よっぽどチームのメンバーに困っているか分かりませんが、ちょっと勇気がいると思いますよね。自分の仕事で行ったところのお客さんに声をかけるのは。ただ、それだけのことですが、でもそこからすごく広がっていくということが起きるんだなということがよく分かりました。石岡さんももちろん、消防団に入りませんかと言われて、「めんどくさいな。忙しいからいいよ」と言わなくて、入ろうかなと。そういうところの一つ一つが大きな違いを生んでいって、すばらしいなと思います。

よくこの地域の活性化には「よそもの、わかもの、ばかもの」と言うんですけれども、石岡さんはあまりばかものという感じはしないのですけれども、よそもので、ちょっと若者ですかね。中間ぐらいの世代でいらっしゃると思いますけれども、新しい一歩がこういうふうに大きな影響を、波紋というか、広がりにつながっていくのだと思いました。

本当に石岡さん、たくさん頑張っていると思いますけれども、もし星の里いせきの方がいらっしゃったら、少しお仕事を分けていただいて、ますます大変になりそうなので、みんなで協力してやっていただければと思います。

それでは、神石高原町に新たな力を生んでいただいている石岡さんに大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

#### ○事例発表者（石岡）

どうもありがとうございました。（拍手）

### 事例発表③

#### ●知 事

それでは続いて県立油木高校3年の高山将弘くん、兒玉早紀さん、前原幸亮くんに発表をお願いしたいと思います。

ご承知のとおり油木高校ではナマズの特産化を目指して養殖や加工に取り組んでいらっしゃいます。今、その取組は学校の枠を超えて、耕作放棄地を活用した養殖など、町民参画の取組へと発展しています。

今年の6月には、なんとマツダスタジアムでナマズの天井やフリッターのPR販売をされて大好評を得られたそうです。私も3回ぐらいナマズの天井を食べました。ただ、そのときにはまだ外から来るナマズだったんですけれども、今はここで育てたナマズがようやく食べられるようになってきたということで楽しみにしています。

それでは、発表のテーマは、『なまっしー』で地域おこしです。よろしく願いいたします。

#### ○事例発表者（高山）

これから油木高校で行っている産業ビジネス科の活動について発表したいと思います。



気をつけ、礼。お願いいたします。(拍手)

## ○事例発表者（児玉）

『なまっしー』で地域おこし

広島県立油木高等学校産業ビジネス科

本校のある広島県神石郡神石高原町は広島県北東部にあり、人口は約1万人で、高齢化率は44%に達し、過疎化と高齢化は非常に深刻です。町の主な産業は農業ですが、棚田状の小さな水田や畑が多く、高齢化と減反政策から耕作放棄地は至るところに存在し、その面積は町内で483ヘクタールあり、町内の耕地面積の28%にもなっています。

私たちは町内唯一の農業高校として、地域の課題である耕作放棄地を草等で荒らさず、手間をかけず、収益が上がる方法はないかといろいろ考えた末、ナマズ養殖にたどりつきました。ナマズは白身の魚で、臭いやくせが少なく、刺身、蒲焼き、天ぷら、照り焼きなど様々に調理でき、味は確実に一級品です。ビタミンB1やE、DHAやEPA、コラーゲンなどが多く、がんの発生を抑え、動脈硬化や高血圧を防ぐとともに、美容や滋養強壮にも効果があるとされています。

関東ではナマズは高級魚で1kg3,000円程度で取り引きされています。ナマズは1平方メートル当たり3匹、10アール、1000平方メートル当たりでは3000匹養殖でき、養殖そのものはほとんど手間はかからず、1年もすれば3匹で1kg程度になります。1年間で10アール当たり1,000円掛ける3000匹で300万円の売り上げの可能性があります。私たちはそうしたナマズに地域の未来と活性化を託そうと考え、校内でナマズ養殖を実践し、ナマズの生理生体を研究するため、池づくりから始めました。68枚のコンパネで枠をつくり、25立法メートル、ミキサー車10台の生コンを打ち込み、1年近くかけて池を完成させ、茨城県のナマズ養殖業者から8cm程度のナマズの稚魚600匹を放しました。

また、近くの廃校になった小学校のプールを借り、10年ぶりのプール掃除を行い、2000匹のナマズの稚魚を放流しました。8cmだったナマズの稚魚は2年で50cmの大きさに成長し、昨年はいよいよ本校で育てたナマズの加工や販売をスタートさせています。

プールのナマズを手づくりの底引き網で一気に取り上げ、毎年6月、本校の学園祭で天井や蒲焼きとして販売しています。地域ではナマズは有名で、常に行列ができ、大変好評です。

また、7月の地域の夏祭り、10月の広島フードフェスティバルでも、天井、蒲焼き、フリッターなどを販売し、多くの人から「これはおいしい」と太鼓判をいただきました。

また、昨年6月24日には、広島県議会で「油木高校のナマズを食べる会」を昼食時にやりたいので協力してほしいという依頼があり、50匹のナマズを3枚におろし、県議会の食堂に持ち込みました。蒲焼き、唐揚げ、皮の天ぷらを70人近い県議の先生方に食べていただくとともに、油木高校のナマズ養殖の意義や実践を熱心に聞いてくださいました。ナマズ料理の評判は非常によく、ほとんどの県議の先生がとてもおいしいと褒めてくださいま

した。

### ○事例発表者（高山）

今年の6月21日にはマツダズームズームスタジアムのカーブ対日本ハムの交流戦でナマズ天井とフリッターの販売を行いました。本校のナマズ養殖のテレビを見られた松田オーナーがすばらしい実践だと褒めてくださり、ナマズ養殖に協力したいということで実現しました。300食準備した天井とフリッターを販売し、この日のために生徒がデザインし手づくりしたナマズのゆるキャラ「なまっしー」も大人気でした。

試合後は記者会見室で木村昇吾選手と記念撮影なども行い、ナマズのアピールができるとともに、とても貴重な思い出になりました。

また、マツダスタジアムの食品販売部門の総支配人からも、松田オーナーからマツダスタジアムで常時ナマズ料理を販売し、マツダスタジアムの名物料理にしていきたいという話があり、来年度はイベント的に、再来年度からは常設メニューとして、油木高校のナマズを利用した料理の販売が決定しました。マツダ球場という販路が開かれただけでなく、マツダ球場でのナマズ料理の常設販売は、ナマズという食文化を様々な方面に広げていく大きなチャンスだと考えています。

学校と神石高原町の連携をより強めながら、大急ぎで地域にナマズ養殖を広げていく必要があります。

昨年、プールのある草木地区自治振興区ではナマズ学習会が行われ、地域の耕作放棄地を池に変えられ、ナマズ養殖をスタートされました。今年度はさらに規模を増やしておられます。

また、県立広島大学の生命環境学部の黒木先生とナマズの共同研究を行うことも決まり、ナマズの食品としての機能性を分析し、機能性を生かしたナマズの商品開発にも挑戦していく予定です。

そうした地域の期待の中、本年度は、産卵、ふ化、そして稚魚の生産に挑戦しています。プールからしっぽの切り目で判断し、メス2匹とオス4匹をつかまえ、魚類用麻酔薬FA100の5000倍の希釈で、動物用生殖腺刺激ホルモンであるゴナトロピンを魚体重1グラム当たり10単位として注射し、キンランと呼ばれる人工藻の中で産卵を促しました。ホルモン注射の翌日、2匹のメスで4万匹程度の受精卵を産んでおり、2日後にはふ化に成功しました。共食い対策として、えさは1日に8回と十分に与えながら育てたものの、水カビ病被害が激しく、毎日何千匹と死んでいき、現在約300匹が20cm程度の大きさにまで育っています。水カビ病対策は今後の大きな課題です。

また、私たちのナマズプロジェクトの実践は、共同通信社と全国の地方新聞社46者で主催する地域再生大賞の優秀賞にも選ばれました。高校の実践が選ばれることは非常に珍しく、注目を集めました。

また、イオン1%クラブと毎日新聞社が主催するeco-1グランプリでも中四国大会で優

秀賞となり、12月、東京で行われた最終審査会に中四国代表として出場しました。大変おもしろい実践ということで審査員特別賞 C.W. ニコル賞をいただきました。

今年2月、ウナギが絶滅危惧種に指定され、価格は高騰しています。ナマズ養殖のビジネスチャンスは非常に大きいと言えます。最初の1年や2年は赤字覚悟で、大量の試食もしてもらい、新聞広告やテレビのグルメ番組等、マスコミも最大限に利用しながらナマズのおいしさを理解してもらうことが必要です。私たちのプロジェクト研究の取組の規模と夢はとても大きなプロジェクトです。10年後、20年後、この町が豊かで住みやすい町でい続けられるように頑張ります。これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。  
(拍手)

●知 事

高山くん、兒玉さん、前原くん、ありがとうございました。油木高校のナマズの取組も今は何年目でしたか。

○事例発表者（高山）

ナマズプロジェクトは5年目です。

●知 事

5年目にしてマツダスタジアムに行き着けて、うれしかったですか。

○事例発表者（高山）

はい。ナマズを売ることができる、球場での販売に向けて、これからより道が開けるかなという面でも、すごく嬉しく思っています。

●知 事

地域の皆さんも、まだ1回もしていないけれども、実際今度は仕事としてナマズ養殖をこれからされるんですね。

○事例発表者（高山）

はい。

●知 事

それはどういうふうに期待していますか。

○事例発表者（高山）

私たちが行ってきたことを、私たちだけでなく、地域の方々も一緒にやっていけることはとても嬉しく思っています。

●知 事

将来どうですか。このナマズが神石の特産品になったときの絵柄というのはどんなふうに想像していますか。

○事例発表者（高山）

想像がつかないのですが、自分たちが行ってきたそうしたナマズの養殖がより広がって、特産物になってくれれば、私たちが帰ってきたときに、そうした特産物があれば、私たち

がやってきたことが今まで続けられているんだなというような感じで思っていけると思います。

●知 事

兒玉さんはどうですか。どんなふうになったらいいなと思いますか。

○事例発表者（兒玉）

ナマズは関東のほうでは有名なので、中国地方でももっと同じように有名にしていきたいです。

●知 事

なるほど。前原くん、今日はテクニカル担当で、ありがとうございます。

関東で売れているらしいけれども、関東にナマズを持って行くのはどうですか。

○事例発表者（前原）

よく分かりません。

●知 事

これからまたいろいろ研究してもらいたいと思いますけれども、地道な活動が5年間かけていわゆる商品化というところまで来たなという感じで、油木高校の皆さんも頑張ってくれています。それでは、改めて発表いただいた高山くん、兒玉さん、そして前原くんに大きな拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

## 事例発表④

●知 事

ちょっと時間も過ぎているのですが、最後の発表です。最後の発表は、神石高原町立神石高原中学校3年生で生徒会役員の田邊佑季さん、古森茉文さん、清水結衣さん、3人をお願いします。

改めてご紹介しますと、ご存じのとおり神石高原中学校は今年度できました。神石、油木、豊松の3中学校が統合されて新設されたわけですが、新設校として生徒一人一人が期待を胸に抱いて、新しい学校文化を築いていこうと日々学業や文化活動に挑戦されています。

今日の発表のテーマは、「挑戦 新設校の風土を創る」です。それでは、お願いします。

○事例発表者（古森）

皆さん、こんにちは。（「こんにちは」の声あり）今日は、校訓「夢・実現」に向かって新設校の風土を創ろうとしている私たちの挑戦を紹介します。

私たち3人は、神石、油木、豊松中学校の最後の生徒会長です。統合前、私には統合への期待と閉校に対する寂しさがありました。2年間通い続けた親しみある学校へいつものように登校できないことや、この学校を卒業できないことに対する寂しさです。

しかし、それ以上に統合への期待もありました。統合することで3校のよい校風が重なり、すばらしい学校にできるのではないかと。人数が増えることで勉強や部活動、行事などをさらに充実させることができるのではないかと期待です。

本校は地域住民の期待と願いが一体となった一大プロジェクトとして誕生した学校です。私たち初代生徒会の大きな使命は、よき風土をつくっていくことです。そのために特に力を入れているのが「あいさつ」と「歌声」です。私たちは立ち止まってあいさつをする静止あいさつと、先に「おはようございます。お願いします。」と言葉を発してから後で礼をする千言後礼を徹底しています。この二つに気をつけて、普段の生活でも、部活動でも、あいさつをしています。

私たちの校歌「ひかりのそのさきへ」は、神石出身のタレント福本ヒデさんたちが自然あふれる学校に笑顔が満ちるようにと願いを込めてつくってくださった歌です。

落成式の時、私たちはみんなに笑顔で大きな声で楽しく歌ってほしくて、「聞く人と作詞者を感動させる歌声をつくる」を目標として練習を積み重ねました。強弱をつけたり、優しく包むようにするところを考えたりして、レベル5に近づけるように努力しました。本番の落成式では、みんな最高の歌声で合唱ができ、全員が達成感を持ってました。この歌声とあいさつは私たちが胸を張って誇れる校風です。

#### ○事例発表者（田邊）

6月に行った第1回体育大会は、「新設校の伝統は私たちが創る」を合い言葉に、実行委員で考えた「初志貫徹～全力・協力・迫力～」というテーマを掲げて、全員が力を出し尽くしました。

まず始まった行進の練習、中学生らしいびしっとした行進です。女子種目のソーラン踊り、男子種目の組み体操では、3年生が先に覚えて、1、2年生に指導しました。赤白に分かれて行う応援合戦は3年生がかけごえ、振り付けを考えて、放課後1、2年生に教えながら一生懸命練習しました。本番は全員がすべての競技で本気でぶつかりあい、閉会式後の解散時には先生も生徒も涙を流しました。

男子の6段ピラミッドは一度も成功できませんでしたが、一生懸命歯を食いしばってみんなが心を一つにしている姿は輝いていました。

私たちにとっては最初で最後の体育大会、体育大会実行委員としての責任や不安もありましたが、みんなで感動し、悔しい思いをし、喜び合うことができました。一人一人が自分の係の仕事をこなし、リーダーとして動くことで成長できる貴重な体験になりました。

また、11月には第1回の文化祭を行いました。体育大会のように思い出に残る行事にしようとして生徒会を中心に「千支絆厚」というテーマを掲げて取り組みました。一人一人が自分の役や仕事に責任を持ち、新設校の風土、伝統をつくろうと自覚を持ってやりきることができたと思います。

#### ○事例発表者（清水）

私たちは、今、最高の学習環境の中で学習をしています。美しい校舎で同級生と切磋琢磨しながら学び合っています。

図書室にはたくさんの本がきちんと整理されていて、私たちの学習を豊かにしてくれています。

また、学校には寮があり、私は寮長としても活動しています。早期入舎で仲間も増え、4月当初7人だった寮生が今は25人に増え、さらに活気が出てきています。寮では学習時間がしっかりと確保されており、毎週月曜日と水曜日には数学と英語の先生が学習に来られます。私はこの最高の環境で過ごせることに感謝しています。そして、この最高の環境を与えてくださり、応援し、支えてくださるすべての方々への恩返しとして、社会に貢献できる人になりたいと決意しています。

私たちが今、築こうとしている伝統は、これからの神石高原中学校の基盤となります。後輩たちはその基盤をしっかりと受け継いで、さらによりよい伝統に発展させてくれると信じています。そのために、責任を持って未来へつなげていこうと思っています。

開校してわずかですが、新設校の第1期生としての自覚と誇りを持った全校生徒の雰囲気はトップレベルだと思います。日本一の学校を目指し、これからも伝統の礎を築くという夢に向かって挑戦を続けていきます。

これで私たちの発表を終わります。(拍手)

●知 事

ありがとうございました。最初のところで紹介してもらったのですけれども、統合前の生徒会長さんだったんですか、それぞれ3人が3校の。

○事例発表者(田邊)

はい。

●知 事

全員女子だったんですか。

○事例発表者(田邊)

はい。

●知 事

それはたまたま？

○事例発表者(田邊)

たまたまです。

●知 事

そうですか。女子、強いですね。

今、すばらしい発表をしてくれたのですけれども、新しい学校はどうですか。好きですか。

○事例発表者(田邊)

好きです。みんな優しい人たちで、大好きです。

●知 事

先生方は3校から集まったのですか。

○事例発表者（田邊）

はい、そうです。

●知 事

それぞれまた新しい先生との出会いというのもあったのかな。

○事例発表者（田邊）

はい。

●知 事

ちょっとお聞きしたいのですが、3人それぞれ、将来はどんなことを考えていますか。

○事例発表者（田邊）

私は中学校を卒業した後に、高校でソフトテニス部に入って、またここに帰ってきて、今の中学校の後輩たちにその学んだことを教えたいと思っています。

●知 事

ソフトテニスを教えたい。

○事例発表者（田邊）

はい。

●知 事

なるほど。どこかソフトテニスが強い高校に行きたいのかな。

○事例発表者（田邊）

いや、それは違います。

●知 事

なるほどね。ありがとうございます。

古森さんは。

○事例発表者（古森）

私は、将来やりたいことがまだはっきりとは決まっていないので、高校生になったときに、高校で学習をしながら決めていきたいと思っているんですけども、なるべく町内でできる仕事に就きたいと思っています。

●知 事

なるほど。トマトがありますよ。

清水さんは。

○事例発表者（清水）

私はほかの2人とは違うのですが、高校は地元の学校に進学して、バレー部で頑張っていきたいと思っているのと、私は英語が好きなので、地元の高校で英語をしっかりと学んで、

その英語で世界に飛び立つというか、私は貧しい国への支援をしてみたいと考えているので、そんな感じで今は頑張っていきたいと思っています。

#### ●知 事

なるほど。ありがとうございました。3人ともすごくしっかりとしていて、発表もはっきり言っていたのではないかと思いますし、今日の発表は先生方から無理矢理これと言えと言われたんじゃないと。そんなことはないですか。

#### ○事例発表者

いえ。

#### ●知 事

本当に伝統をつくっていくのは私たちであると。この基盤をつくって、それを後輩が受け継いでくれる。すごい責任感ですよ。僕も聞いていて、こんなすばらしい子供たちがいるというのは広島未来も、神石高原未来も明るいなと感じました。三つ子の魂百までではないのですけれども、最初の卒業生、3年生がこうやってしっかりと学校づくりをしてくれたら、神石高原中学校もすばらしい学校になっていくと思いますし、大人は中学校の合併についていろいろなご意見もあったと思いますし、それぞれの卒業生の方々も自分の卒業した学校がなくなって寂しいとか、そういうのがあったと思いますけれども、子供たちは前を向いて、希望を持って進んでいるなということが本当によく分かりました。明るい未来を創ってくれるに違いない田邊さん、古森さん、そして清水さんにもう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。(拍手)

## 閉 会

#### ●知 事

随分時間を超過してしまいました。すみません。本当にありがとうございました。

今日4組の方に発表をいただきましたけれども、冒頭に私が申し上げましたように、本当に元気をもたらえるというのがお分かりいただけたのではないかと思います。今、発表してもらった中学生の3人も、もちろん生徒会長ですが、決してスーパーガールたちではない普通の生徒だと思いますけれども、こうやってしっかり育てられている。ただ何か言われたことをやるというだけではなく、新しい学校づくりに自分たちが取り組んでいるということをちょっと実践してもらうことで、宝物のような学校ができていくと思いますし、油木高校の皆さんもナマズという新しい宝をつくってくれている。また、外から神石高原町に来て、そのまま受け身で放っておくのではなくて、自分ができることをやることによって、この地域が変わっていく、変えていく石岡さんであるとか、今朝、私はトマト団地に行ってきたんですけれども、本当にトマトがおいしくて、この時期にとれたトマトなんです。もう終わりごろなんですけれども、この時期のほうがおいしいという話もありまし



たけれども、おいしいトマトで、非常に収益の高い農業ができる。僕はこれを神石高原の赤い希望の星ではないかと言ったんですけれども、それをお父さんから引き継いで育てていらっしやる小田さんとか、人ができることはいろいろたくさんあると思います。それぞれご縁があって、いろいろなところでいろいろな役割を果たしておられるわけですが、それぞれが与えられた、あるいはいただいた役割であるとか、やっていることを一歩、ちょっとだけ押し進めると大きな違いが生まれてくる。石岡さんのように地域の人を巻き込んで波をつくっていく。波紋をつくっていく。まさにポチャンと落ちた石から波紋が広がっていくような、そんな感じがいたしましたけれども、我々一人一人がそういうことに取り組んでいくと、地域全体で、神石高原町が、そして広島県全体が大きな差を感じるのではないかと改めて感じました。是非今日傍聴の皆様も、明日からと言わず、今日から、一歩だけ前へ出て何かをやってみるということに挑戦していただければと思います。

それでは、改めまして今日本当に貴重なお話を共有していただきました4組の発表者の皆様に大きな拍手をお願いいたします。(拍手) どうもありがとうございました。

最後に、これで会は終了ですけれども、お願いがございます。実は広島県はテレビのデータ放送、今、デジタルに皆さんなっていると思いますが、このデジタルボタンを押していただいて、高齢者に健康・医療・地域情報を簡単にお届けするシステムをつくっています。今年の4月からサービスを始めたのですが、RCCで健康ニュースや病院の情報などが得られるようになっていきます。情報を得るだけではなくて、自分の体重や血圧などの変化を入力してテレビ画面で見て、自分の体重を管理するというようなこともできます。

テレビがインターネットに接続されていれば、離れて暮らしておられる家族などに健康状態をメールで知らせることができるということで、見守りの一環として、そんなこともできるようになっています。

チラシがお手元の資料の中に入っておりますので、是非ごらんいただいて、ご活用いただければと思います。

以上で終わりでございます。本当にどうもありがとうございました。(拍手)

## ○司 会

以上をもちまして「湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」を閉会いたします。ご来場いただきました皆様、本当にありがとうございました。

なお、ご来場時にお渡ししたアンケートと、地域の宝ネットワークの申込書を出口で回収いたしますので、よろしく願いいたします。

また、地域の宝ネットワークにおいては、フェイスブックによる情報の交流を行っておりますので、是非ご参加ください。

本日はご参加をいただき誠にありがとうございました。どうかお気をつけてお帰りくださいませ。どうもありがとうございました。(拍手)